



漆の一大産地として栄えた鳥取市佐治町の「佐治漆」を産業として再興しようと、2016年に地元有志らで研究会を立ち上げた。佐治漆の森づくりや漆掻き技術の伝承などに取り組む。

佐治漆は600年の歴史があり、最盛期の江戸時代末期には5110本の漆の木が植えられ、漆液が1177キログラム採られた。明治以降も漆栽培は続いたが、戦後、安価な外国産漆の輸入などで衰退し、昭和40年代に消滅した。研究会のメンバーは地元有志ら6人。谷口輝男会長(79)によると、①漆の木を育てる②漆技術を地域や子どもたちに伝承する③漆掻きを実体験する―の方針で、活動してい

■75□

佐治漆研究会 (鳥取市佐治町)

漆産業再興へ魅力伝える



鳥取市佐治町加瀬木で漆の樹液を採取する佐治漆研究会のメンバー

る。2017年から町内2カ所の荒廃農地を「佐治漆の森」の木から樹液を採取する漆掻きとして、漆の木を植栽し、約100本が育った。事務局長で漆芸家の橋谷田岩男さん(68)は「500本から千本育てば、漆産業として成り立つ」と将来を見据える。佐治漆の周知のため、県の令和新时代創造県民運動推進補助金などを活用して7月に韓国産の漆料理試食会、8月5日には地元の小中学生を対象とした漆塗り体験会を開催した。参加者は、漆の森から樹液を採取する漆掻きや佐治和紙のコースターに漆を塗る体験を楽しんだ。副会長の田中精夫さん(71)は「生活に密着した漆文化を復活させ、産業として掘り起こしたい。今後は展示会などを通じてさらに魅力を伝えていきたい」と、谷口会長は「地域のみなさんに関心を持ってもらい、漆が産業になることを知ってほしい」と佐治漆の輪の広がりを期待する。